２０１４年１０月号・季刊４７号

ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子ども図書館　松居友

まだ決定ではないものの
反政府地域で最も困難な場所
リグアサン湿原の最奥の集落カルボガンに
小学校建設の可能性を調査。
大きな弊害の一つが、
前村長と現村長の激しい対立だった。
武器を持って、互いに殺すと公言していた。
しかし、両者の間に入り、対話を推進、
先日は、洪水支援のいっかんとして
集落の人々に古着の支援をした。
その時、両者の友情が戻り奇跡が起こった！
ＭＣＬでは、サパカンの小学校建設をふくめ
現在、この地域に力を入れている。
なぜなら、今まで行ってきた
政府と反政府ＭＩＬＦとの和平交渉が
２０１６年の大統領選の直前に決裂し、
ミンダナオが戦場になると噂されているから・・・
その場合、最大の戦闘地が、
このリグアサン湿原だというのだ。
ここには、ＭＣＬの奨学生も沢山いて
先日の保護者のミーティングでも、
来年からＭＣＬに子どもたちを移したいという
イスラムの親がたくさん出てきた。
戦争になったら、現地がいかに危険か
過去の経験から知っており、
安全なＭＣＬに子を移したいというのだ。
それ故にこそ、今から現地支援を拡大し
地域和平を構築して、今のうちに
現地との友好を深めていこうと考えている。
子どもたちを安全に救済するために！

Mindano Children's Libary Foundation, Inc.
MCL

保育所と平和構築

１０月は、保育所を寄贈して下さった方々に、季刊誌のなかに最新の今の保育所の写真を入れて送り、現状をお伝えする月です。

保育所は、数年ごとに修理をしていきますが、場所によっては、戦闘などで破壊されたり、多くの住民が避難してしまっていたりして、移転を余儀なくされているものもあって、一筋縄ではいかないのが悩みです。

しかし、スタッフたちは、現状を調査するためにも時には馬にまたがって、保育所の写真を撮っています。いったん建てたからには、支援者の思いも汲み取って、毎年状況を調べ、そろそろ竹の外壁や屋根、そしてコンクリートの基礎のペンキ塗りも開始する予定です。

しかし、２０１６年に、ミンダナオ全域で大きな戦争が起こる可能性があるという指摘もあり、戦争が起こっても多くの子どもたちを救済支援できるようにするための準備もあり、なかなか複雑な状況です。

しかし、皆さんが寄贈して下さった保育所は、地域の集落との友情関係を保つための非常に大きなツールでもあり、平和構築に役立っています。

戦争が起きても、子どもたちを救済できるように

松居友

８月１８日の世界日報オンライン版で、以下の記事が掲載された。

２０１６年までの創設に黄信号

「今年3月に国内最大のイスラム武装勢力のモロ・イスラム解放戦線（ＭＩＬＦ）が、新しい自治政府（バンサモロ）の創設を条件に武装解除などの要求に応じ、政府との包括和平合意文書に調印したことで、比南部ミンダナオ島における和平問題は大きな前進を果たした。しかし、ここにきてバンサモロ基本法案の内容で再び見解の相違が浮上。基本法案の国会提出が大幅に遅れており、アキノ大統領の任期が終了する２０１６年までの和平実現に、黄信号がともり始めている。」

まさに、私たちが心配している事が現実になりつつある。

２００８年の時も、マレーシアで合意の直前に交渉決裂。８０万の避難民が出る戦争に突入した。当時は、私も、単純に和平を信じていたが、あっけない展開に、こうした交渉の持つ背後の意味を模索すると同時に、戦争を作るシステムを考えざるを得なくなった。

今年は、ダバオからコタバトの道路建設もほぼコンクリートで完成したし（戦争が起きる前に道路が整備される。特にコンクリートが使われるのは、戦車を通すためだという。）アメリカ軍も１０年間駐留することが決定したし。２０００年に米軍と政府軍が共同でイスラム勢力を攻撃して、１００万を超える難民が出た以上に、場合によっては、２０１６年には、米軍といっしょに、集団的自衛権の実行で、阿部首相が言ったようにＮＧＯを救済するという理由で、日本軍も戦争へ参戦するのではと、現地では噂されている。そのＮＧＯとは、ＭＣＬの事のようだと・・・その前あたりに、松居友を誘拐して事を荒立てて報道を仕掛けるのではと・・・。

先日の保護者のミィーティングでも、イスラムの人々から、来年は、子どもたちをＭＣＬに預けたいという親や保護者が出た。２０１６年に起こるだろう戦争から子どもたちを、少しでも守るように、ＭＣＬに子どもたちを移したいと言う事だ。

やれやれ、とにかく、子どもたちの事を考えて、彼らの救済の準備を始めなければならない！では、ＭＣＬで、今何をすることが出来るだろう。

戦争になった時に、庶民とりわけ子どもたちを救済するのに最も重要な要素は、戦闘が起こっている危険な地域

に救済のために入れることだ。

２００８年の８０万の避難民が出たと言われている戦闘の時も、一般のＮＧＯが入れない地域に、ＭＣＬだけは入って活動してきた。というよりも、他のＮＧＯが支援を開始した場所は、そちらにすぐに明け渡し、ＭＣＬは、さらに奥の危険地域に救済活動を広げていった。

なぜそのようなことが可能だったというと、結局は、普段からのおつきあいのえんちょう線上に支援活動があったから。具体的にいうと、戦争がない時も、その地域に保育所を建てたり、奨学生を採用したり、そしてとくに医療や読み語りの活動をして、隣人としての友情のお付き合いをしてきたからだ。

今回、２０１６年に戦争が起こった時にもっとも困難な状況になる地域「リグアサン湿原」の奥の集落と、今のうちにさらに深いお付き合いを持つことにした。その一つ、サパカン集落には、もうじきＭＣＬがパガルガン地方政府に提案した小学校が、日本大使館の支援で完成する。ＪＩＣＡからＩＭＴ国際停戦監視団に派遣された中川さんの提案で、洪水の場合の避難所としても機能する優れたものだ。

しかし、さらに奥に、最も危険で難しい地域、カルボガンがあり、そこそこそ和平構築に最も重要な場所の一つで、戦争の時には救済を必要とする地域なのだ。私たちは、かなり前からのお付合いで奨学生も多くいるし、保育所も建てた場所だし、かねてから小学校建設を考えてきたが、躊躇していた。理由は、内部で前村長と現村長の内部抗争があって、その問題がある限り不安を拭い去れなかったからだ。

しかし、かつてブアランの小学校建設も、山の上のクリスチャンと下のイスラム教徒が４０年にわたって対立して来たが、小学校建設を条件に和平交渉を実行し、見事に平和が構築された。そこで今回、思い切って、ＭＣＬの責任で、ここに小学校を建てる計画を日本政府に提出することに決めた。

その準備の一環として、最初に市長と前と現村長との公的話し合いを持ち現地に提案、さらに先日、洪水の起こっているときに古着の支援をした。これ

リグアサン湿原を舟で行く。反政府勢力の人々が守ってくれている。

洪水時の避難場所としても機能するサパカン小学校

古着をもらって喜ぶ人々

最も困難な集落の一つ、カルボガンの小学校。生徒は外や納屋で学んでいる。戦争が起こる前に、ここに小学校を建てたいのだが・・・

３　テレビで放映された「なぜここに日本人」を、ミンダナオ子ども図書館の映像サイトに掲載しました。

「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews から、映像サイトに入れます。

も人々との密な交流を、平和なうちに作っておくためだ。

これが大成功。村人たちが大喜びしてくれたことを通して、見事に対立が解消され、前村長と現村長が握手をかわしたのだ！大使館の皆さん、現地での対立は解消されたので、少なくともリドーの心配はなくなりましたよ。

さらにこれを機に、前村長は、脳梗塞を起こして体が不自由なので、その子の一人を奨学生にして、大学まで行けるようにすることにした。こういう子にこそ、ムスリム、クリスチャン、先住民が仲良くしているＭＣＬの奨学生になって、将来に本当の和平構築をしてほしいと思ったからだ！

地域リーダーをしているかつての奨学生に会えた。右は家族。

国際情勢の中のミンダナオ

国勢情勢の動きが、ミンダナオにも深く底辺で影響していることが、様々な戦争勃発に関連して、感じられて以来。ミンダナオの平和、子どもたちのことを考えるときには、背景としての国際情勢を意識するようになった。

世界の状況は良くない。中東では反政府勢力による誘拐や爆弾事件がつづき、ジャーナリストやＮＧＯ関係者が誘拐され殺害されている。これは、ミンダナオで大きな戦争が起こるときの状況にまったくよく似ている。

ただミンダナオと比べてみると、特に日本のように、普段緊張した状況が国内にあまりないような国々で育った

古着をもらって大喜び。地域との繋がりが深まる。

者は、僕を含めてマスコミの報道にしたがって、すべてを鵜呑みにしてしまう危険がある。

たとえば先ほどの情報。「反政府勢力による誘拐や爆弾事件がつづき、ジャーナリストやＮＧＯ関係者が誘拐され殺害されている。」という記事を読んで、「マスコミでは反政府勢力の仕業と思われる、と報道されていても、簡単に信じてはいけない。体制側が戦争を起こすために意図的に裏で仕掛けている可能性もあるから・・・」などと考える日本人がいるだろうか。

ミンダナオでは、爆弾事件を調べたら、政府軍しか持っていない部品の破片が出てきた・・・とか、マスコミでは反政府組織の仕業と書かれていても、誘拐犯は、どうみても反政府組織とは思えない、などといった話が裏で聞こえてくるので、人々は簡単に報道を信じない。

もちろん、中東では、反政府勢力が誘拐や殺害のビデオを流したりしているから、報道の通りなのだろうけれども、その反政府勢力そのものが、大国からの資金や武器供与を内密に受けて、戦争を起こすための役割を買って出ているとしたらどうだろうか。

戦争を起こすための理由は、「武器売却と資源獲得」だとすれば、それによってどこが儲かるかを考えれば、いろいろな視点が見えてくる。

さて、話をミンダナオにもどそう。

ミンダナオでは、２００６年あたりから、フィリピン政府とＭＩＬＦモロ・イスラム解放戦線との和平交渉が行なわれていて、日本もＩＭＴ国際停戦監視団を通して交渉に参加しているが、その期限が、アキノ大統領の任期が切れる２０１６年だ。２０１６年は、大統領選をはじめとする大規模な国政選挙の年で、その前に和平協定が成立し、最初のバンサモロ自治政府が出来なければ、最終戦争に向かうというのが、ＭＩＬＦを含むイスラム側の主張だ。

最終戦争の目的は、ミンダナオを独立させて、イスラムの国にすることだ。そのための戦争を、ダバオも含むミンダナオ全土で開始するという事で、過去４０年間、繰り返し和平交渉をしてきたが、そのたびに裏切られたがゆえに手段を選ばない、という。

イスラム教徒は、ミンダナオ全土に広がっているから、たとえ米軍や政府軍が、無人戦闘機を使って攻撃してきてもゲリラ的に戦闘を開始、勝利するまで継続していくという。

最近、中東における過激派組織イスラム国（ＩＳ）の動きが気になってい

たが、２０１６年の和平交渉が決裂すれば、ミンダナオでも同様の動きが勃発していくだろう。すでにダバオ市長が公表しているように、ミンダナオからもイスラム国に、多くのフィリピンの若者たちが戦士として参加している。彼らが現地で訓練をうけて、将来ミンダナオにイスラム国を樹立させる原動力となるのだそうだ。

イスラム国は、中東を爆撃し始めたアメリカと欧州諸国に対して、無差別テロを宣言をしているが、ターゲットのなかに、フィリピンや日本はまだ入っていないようだが、オバマ大統領がフィリピンに来た折、アキノ大統領は、米軍の１０年回の滞在を要請した

し、日本では、集団的自衛権をたてまえに、海外派兵を可能にさせる動きがある。このふたつは、表向きは中国の脅威があげられているが、ＭＮＬＦのミズワリ議長が言ったように、２０１６年に戦争が起こった時に、ＭＩＬＦを掃討するために米軍の力を借りるためだと言われている。

２０００年、２００１年の比米合同作戦とテロリスト掃討作戦の時、死者を葬ることなく川に流したと言われている戦闘が起き、現地のイスラム教徒の反米感情は強い。

まさにそのとき、僕はミンダナオでたくさんの避難民の悲惨な状況をみてショックを受け、それをきっかけにＭＣＬを開始したが。それほど多くの人々が亡くなったのだ。その後のイラクの爆撃でも、多くの市民が亡くなったようだが、第二次世界大戦の日本軍の残虐行為同様に、このような経験をすれば、人々の憎悪は無限に掻き立てられて残るだろう。

しかも２０１６年の戦争に、かつて第二次世界大戦で残虐な行為を働いたとされている日本軍が、集団的自衛権を建前に参戦してくるとしたならば、日本人に対する憎悪も勃発し、日本人が関係しているＮＧＯのＭＣＬは、極度の危険に落とし込められるだろう。

戦争を作るための意図は、現地では、武器売却と土地と資源の獲得だといわれている。そのために、キリスト教とイスラム教といった宗教が、意図的に利用されて、善悪二元論が形作られ、戦争が起こされていく。

しかし、その背後で、結局お金を手にするのは、武器商人と資源開発企業で、武器は国税を懐に入れる最良の手段。戦争資金は、戦争を作るために体制と反体制の両者にながされ、勝った方から資源を獲得できさえすれば、それで儲けを手にできる。可愛そうなの

は、戦闘で殺されたり避難生活を余儀なくされる、一般の人々と子どもたち。

日本は、戦争を意図的に作るための善悪二元論にはまることなく、（それを操っているのは、二元論の外側にたって、笑って操作している第三者で、これこそ悪魔と呼ばれるもの？）スイスのように、永世中立国であることを宣言し、技術産業と観光業で立国していくの良いと思うのだが！

世界から見ても、日本は小さな島国ながら、山も海も自然が多様で古都の文化も美しい。ミンダナオが戦争になっても、日本軍だけは、出てきてもらわない方が、私も子どもたちの救済に安全に向かえるのですが！

メール：mcl.v.staff@gmail.com（現地日本人スタッフ）

電話番号：080-4423-2998（日本国内から現地に転送・松居友）
09219603640（現地携帯電話フィリピン使用・松居友）
mcltomo@yahoo.co.jp（松居友へメール）

ミンダナオ子ども図書館で うれしかったこと

宮木　梓

日曜の夕方、そろそろ水浴びをして洗濯をして、晩ご飯までのんびりしようか、と部屋へ戻ろうとすると、小学校低学年くらいの子どもたちが手を握ってくる。そのまま手を引いて、ザボンのような実のなる高い木の下で、「食べる？」「うちら、サルになるねん」と口々に言う。

アリがたくさん歩いている幹をスルスルと登って、細い枝の先についている、赤ちゃんの頭くらいある大きい実を6つほどボトボト落とす。

台所へ行き包丁を借りて、必死で分厚い実の皮をけずる。「ほなあんた、これ食べや」「塩つけるとおいしいで」8人くらいでしゃがみこんで、黙々と食べる。食べ終わったら踊って、馬跳びをして、滑り台にぶら下がっていたら、日が沈んだ。

ミンダナオ子ども図書館に来てうれしかったのは、大人も子どももみんなが「日本人の私」でなく、「ただの私」を迎え入れてくれたことだ。

ここに来る前、私はフィリピンのネグロス島の西北にある、有機農業のモデル農場で働いていた。ボランティアだったので、日本でアルバイトをして、お金を貯めては、ネグロスにもどっていた。

西ネグロスには、見渡す限りのサトウキビプランテーションが広がっている。私の働く農場は、サトウキビで生計を立てる人の多い村にあった。サトウキビ労働の日当は、８０ペソから１２０ペソ（１６０円から２４０円）。会う人会う人が、「貧しい。お金が無い」と言った。日本人に経済的援助を期待して近づいてくる人も多かったので、友だちを見つけるのが難しかった。しかし、私は彼らの生活にあこがれていた。

風が吹けば木から枝が落ち、それを拾い集めてご飯を炊く。こぼれたお米を鶏が食べに来る。井戸端に集まっておしゃべりしながら洗濯をする。マンゴーの木に登った子どもたちが鈴なりになって笑っている。青いマンゴーをかじりながら、竹の小屋に寝転がってみんなでお昼寝をする。仕事の終わった水牛を水浴びさせて、家に連れて帰る。外にイスを出して、虫やカエルの声を聞きながら、お月様を眺める。

フィリピンに行く前、日本で生まれ育った私の存在が現地の人たちに、「自分たちは貧しいのだなぁ」、と感じさせなければいいけれど、と思っていた。私は、安心な家で満足に食べて育ち、当たり前の様に大学を卒業させてもらった。お小遣いや、アルバイトで貯めたお金で欲しいものを簡単に買うことができた。日本では普通だった生活が、フィリピンでは難しい。私を見ることで、相対的に自分が物質的に貧しいと感じさせないだろうか。

私は１４歳のときに西宮で阪神・淡路大震災を経験した。幸い家族も家も無事だったが、道路は液状化でひび割れ、泥水が噴き出し、ガスや水道は１ヶ月止まった。お店からは食品も日用品

も消え、母はパニックになった。
父は海外出張中だったので、アスファルトの下の割れた水道管からあふれる水をバケツで運んでお風呂に貯め、飲み水のために給水車に並ぶのは私と妹の仕事だった。学校は休校になっていたが、自分たちが家族のために働けることがうれしかった。
たくさんのボランティアが私たちの町にもやって来た。そこで初めて自分が、「助けられる立場」になったのだと知った。それまで、自分がアジアやアフリカのかわいそうな子どもたちを助けてあげるのだと思っていた。どこか遠くから来たボランティアの人たちは、崩れた家や、マンションや高速道路を見て「すごい」「ひどい」「かわいそう」と言いながら、次々に写真を撮った。

私にとって崩れた街並みはすぐに日常になっていたし、自分をかわいそうだと思いもしなかった。だから、外の人から「かわいそうな被災者」と名前を付けられたことがショックだった。この人たちは、何日かしたら壊れていないきれいな町に戻って、「かわいそうな被災者」を助けるボランティアをしたと褒められていいなぁ、と思った。
もちろん、被災地にはボランティアが必要だったし、膨大な救援物資の仕分けや、温かい食事の炊き出しをして、たくさん助けてくれたことも知っている。それでも、当時の私はボランティアを心から受け入れられなかった。ただ、救援物資の箱に書かれた励ましのメッセージはすごくうれしかった。自分たちは、世界から見捨てられていない、と思った。
ミンダナオ子ども図書館で暮らしている子どもたちは、3食満足に食べられないほど生活の厳しい家庭から来たという。けれども、自分たちは貧しく社会の底辺にいるというような劣等感を感じない。経済的に恵まれた日本で育った私を、自分たちと同じように受け入れてくれる。新しい生活に慣れない私に、「ご飯の鐘が鳴ったで。食堂行こう。お腹空いたやんな」と教えてくれる。一人でいると、「寂しくない？ここに座り」と心配してぎゅうっと抱きしめてくれる。
私も、子どもたちに、たくさんたくさん助けてくれている人がいるよ、忘れられてないよ、と伝えたい。そして、しっかりご飯を食べて、安心して学校に行ってほしい。そのために働くことが、大人になった私のできることだと思う。

これからのわたしとMCL

秀島　彩女

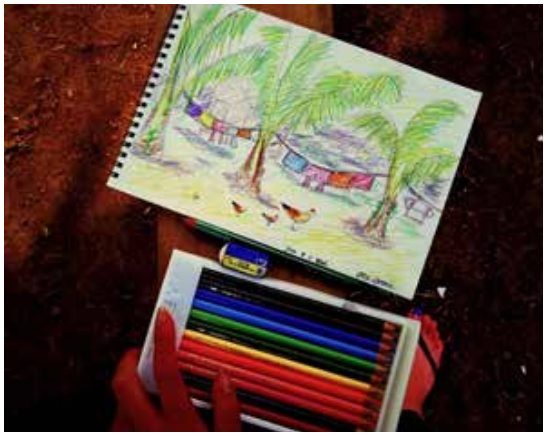
Ate ayame～！！っと、みんなが驚いた顔、きらきらの笑顔。ああやっとまたこの笑顔に会えた。懐かしい気持ち、嬉しい気持ち、そしてこれからの子どもたちとの生活を考えるとどきどきわくわくでいっぱいの私。
私にとって2回目となるミンダナオ、MCL訪問。前回は2週間弱であったが今回は約7か月滞在させていただくことになった。現在立命館アジア太平洋大学の2年生であるが、今回の滞在のため大学の休学を決めた。
なぜ私が休学をしてまでまたMCLに来たいと思ったのか、大きな理由が3つある。1つ目は単純にMCLの子どもたちが大好きで子どもたちのことをもっと知りたい、一緒にいたいと思ったからだ。
たった2週間弱の短い間で私の人生観、価値観は子どもたちとの生活によって大きく変化した。私は日々子どもたちから多くのことを学んだ。3食食べられることへの感謝、発展して物にあふれ、便利なものに頼りきった生活をしている日本では忘れられた表情や文化、生活がたくさんあること。その中でもとくに私が興味をもったのは子どもたちの天真爛漫な笑顔だ。
辛い過去や、厳しい現状、それぞれ

テレビで放映された『なぜここに日本人』を、ミンダナオ子ども図書館の映像サイトに掲載しました。
「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanewsから、映像サイトに入れます。

の問題を抱えているはずの子どもたち。どうしてあの子どもたちの笑顔はあんなにきらきらしているのだろう、どこからきているのだろう？見返りをもとめない優しい心と笑顔、人に優しくすることの意味というか根本的なものを子どもたちと過ごす中で私は知りたい、もっと考えていきたいと思ったのだ。

２つ目は、もっと子どもたちひとりひとりと話したり、話を聞いたり、深く関わっていくことで子どもたちのことを理解し支えてあげることが私なりにできることがあるのではないかと思ったからである。

毎日笑顔で明るく幸せそうに見える子ども達だが、時々力強くも寂しそうで大人びた表情をすることがあるのだ。幸せそうな中でも必ず悲しみや不安があると思う。だから私自身ただその子たちの話を聞くことで、少しでも気持ちをやわらげサポートすることができればと思っている。



そして３つ目、私も将来子どもたちのために働きたいという、漠然とはしているが大きな夢がある。なので、ここでの長期ボランティアとしての仕事の経験は自分の将来にも大きく関わってくると思う。

日々友さんやAprilynさん現地スタッフの方、またいろんな経験をつまれた訪問者の方々との交流の中でたくさん話を聞いたり、アドバイスをいただいたり、意見交換をすることで自分のこれからの目標を少しずつ明確にしていきたいと思う。

早くもＭＣＬに来て一か月がたとうとしている。だいぶＭＣＬでの生活にもなれてきた。子どもたちやスタッフの方、現地の人々のおかげで私は常に笑いが絶えない幸せな毎日を送っている。ここでの生活は、私をいつも笑顔にさせ、笑顔の連鎖というものを実感させる。

来てから子どもたちや現地スタッフの方が、熱心にVisaya語を教えてくれるのもあり、ほんの少しではあるが簡単な会話ができるようになってきた。Visaya語を少しでも話せることで、まだ英語を話すことになれていない小さな子どもたちともコミュニケーションをとれることがわかったので、これからも一生懸命学んでいきたい。

以前は挨拶をかわす程度だった何人かの子どもたちも、自分の家族や将来のことについて話をしてくれるようになってきた。長く子どもたちといることで、子どもたちとの距離がさらに少しずつ縮まっていくのが感じられる毎日で、嬉しい限りだ。

たくさんの気づきがある毎日、びっくりすること、感心すること、いろんなことが起こる毎日。私はここでの生活や子どもたちのことを、多くの人に知ってもらいたく、ブログやＳＭＳでの近況報告にも力をいれている。これからも自分なりにできることを、していきたいと思う。

時間が過ぎるのはあっという間だが、一日一日ここでの生活を、そして一秒一秒子どもたちとの時間を大切に、これからも過ごしていきたい。

改めてＭＣＬに帰ってくることができて、とても嬉しく感じる日々。

この機会を与えてくれた友さんAprilynさん、歓迎してくれたＭＣＬのみなさん、子どもたちそしてどんな時も応援してくれる家族、友人、先生にとても感謝している。

（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

季刊誌の制作経費に関して

季刊誌が日本に届いて、それを読まれた方から、季刊誌が、紙質も印刷も、他の団体の季刊誌よりも、あまりにも上等で、支援金の多くが印刷経費に消えているのではないか、と言う疑問がよせられました。私も出版社にいたので、季刊誌に関しては、出発時点から試行錯誤したことの一つでした。日本の印刷製本費は、非常に高く、それを見ただけでも、これではとても季刊誌は出せない！と思ったほどです。

ＭＣＬの季刊誌は、日本で印刷すれば、とても高額で不可能。それが可能なのは、季刊誌をミンダナオのダバオの老舗の印刷会社で印刷しているからで、印刷価格は、日本で、上質紙に白黒で印刷する程度の価格で、季刊誌はできあがっているのです。製本料にいたっては１０分の一。

さらに、用紙がコート紙で驚かれる方もいらっしゃるのですが、経費を削減することを考えて、上質紙への変更を印刷所に提案しましたら、「ＭＣＬさんは、フィリピンの人々のためによく頑張っているから、写真も美しいし、上質紙の値段でコート紙を提供しますよ。さほどかわらないですから・・・」と言われ現在にいたっているのです。

季刊誌制作に関して、次に気になったのは、発送費でした。海外だと高額ではないか・・・しかし、これも、ほぼ日本の国内での発送と代わりがないことがわかり問題を解決。さらに、他の団体の季刊誌との違いについてよく言われるのが、写真が美しくて、子どもたちの顔を見たり、写真を見るだけでも生きる喜びです、という読者からのご意見です。

縁あって自由寄付をさせていただいた後に 季刊誌が届き、興味を持って拝読する中で 写真の子どもたちの、生き生きとした表情と美しい笑顔が あまりにも素敵で驚いてしまいました。それと同時に 日本の子どもたちが失っているものを突きつけられた気がして、私たち大人の責任を感じました。 この子たちのような笑顔を目標に、自分も自分の仕事（教職）を頑張ろうと思いました。あの笑顔、あの表情に出会えて 私の人生観が変わり、その感謝の気持ちを、スカラシップの支援という形でさせていただいています。

今思えば、表情の臨場感がしっかり伝わる上質の紙での印刷の季刊誌だったからこそ ここまで心に残ったのだと、改めて気づきました。スタッフの方々は 全てにおいて、色々と考え尽くされて 一つ一つのことに取り組んでいらっしゃると思います。季刊誌の件は、全く異議なしです。また現地の方のお心遣いも、嬉しく、益々応援したくなりました。これからも よろしくお願いします＝（ ）＝

Ｔ．Ｓ．匿名

他の季刊誌は、下手するとゴミ箱に直行してしまうけど、ＭＣＬのは、大切の保存して、本のように時々読み返しては楽しんでいます、と言うお便りを良くいただきます。ゴミ箱に直行する印刷物ほどもったいないものはありません。季刊誌も例外ではないと思います。それゆえに、絵本のように、末永く保存して、息子や娘や、近隣の友人たちにも見せたい内容の、単なる報告書ではないものを作るにいたったのです。

読者からは、個人だけではなく、家族で楽しんでいる、という手紙も多く、それゆえ若者たち、青少年や子どもにも楽しめるように、童話を連載しはじめたのも、単なる報告書を一段進めて、心に残り、手元に残しておきたい、価値ある印刷物、冊子にしようと思ったのです。

定期的に季刊誌が送られてくることにより、単に現地を支援しているだけではなく、季刊誌によって、現地からの風が届き、自分たちも心の支援を受けていると言う、相互に支援しつつ支援される意味を、ＭＣＬの季刊誌は持っています。特に、自殺や孤独、不登校の多い日本の人々や若者、そして子どもたちのために。

もうひとつ、付け加えさせていただきますと。部数が、多いほど、一冊あたりの単価が安くなることはご存じかと思います。ＭＣＬでは、支援者が現在３０００人ほどいらっしゃいます。そうしますと、一冊あたりの原価は、はるかに安くなり、個人の方々の負担は、支援者が多くなり印刷部数が多いだけ、遙かに少なくなるのです。

上記の子たち以外にも多くの子たちが待っています。支援者の無い子の情報を知りたい方は、サイト「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanewsから、「まだ支援者の無い子たちの紹介サイト」に。パスワードはmindanao。そこからメールで連絡もとれます。

童話：山菜売りの少女

続き

ミンダナオ子ども図書館の子どもたちは、いっせいにかけよってくると、ギンギンたちを囲んだ。浮浪者を見て、口をポカンとあけて、ビックリした顔をしている子もいる。

浮浪者は、そんなことにはおかまいなく、ストリートチルドレンたちをひきつれて、敷地のなかへと入っていった。

すると、集まって来た子たちのなかの、髪の短い女の子が、とつぜん、ストリートチルドレンたちのところにかけてきて、こがらな少年にだきついた。

「スイーツ！」

だきつかれた少年は、少女をだきしめるとさけんだ。

外国に売られそうになった女の子が、仲間にいるんだ、といっていた男の子。

他の子たちも、まわりによってきた。

「スイーツ。やっぱりここにいたんだね。」

「幸せそうだね。顔が明るくなったもん。」

スイーツは、おおきくうなずいた。

「大きくなったね。」浮浪者が、少女の頭をなぜながらいった。

「今年小学校を卒業するの。」

「ほほう。来年から、高校生か。」

「将来、かんごふになるんだって？」

さきほどの男の子がいった。

「うん、がんばるわ。」

「美人になったなあ。」

スイーツは、まっ赤な顔をしてうつむいた。

いっせいに、ストリートチルドレンたちがはやし立てた。

浮浪者は、ゆっくりとMCLの子どもたちの前にあゆみでると、たずねた。

「アオコイ酋長は、おいでかな。」

「いるはずよ。」

後ろにいた子どもたちの何人かが、青い屋根の家にかけこんでいった。二階は木造のポーチになっていて、手すりからもたくさんの子どもたちが、のぞいている。

酋長というからには、民族衣装に身を固めた、いかつい男が出てくるのかとギンギンはおもったけど、白いシャツを着た、ジーンズ姿のごく普通の男の人だ。男は、浮浪者の顔を見ると、満面笑顔でちかよってきて、両手をにぎると、いった。

「ようこそ、ようこそ。お元気ですか。」

浮浪者も、昔ながらの友だちに会ったかのように、笑顔で、いった。

「一族が、いつもいつも、お世話になっています。」

「まあまあ、中にお入りください。コーヒーでもどうですか。庭にはえているコーヒーの実でつくったものですが。」

「いやいや、つぎの機会にでもゆっくりいただくとして、今日は、ちょっとお願いがあって来ました。」

「どんなことですか？」

「いつもながら、無理なお願いでもうしわけないのですが、ここにいる三人の山菜売りの子たち。お父さんは死んで、土地もなく、母さんと子どもたちだけで苦労して、山菜を売りながら何とか食いつないでいるんだが。学校に行きたくても行けなくて、そのーーー、つまりーーー。」

浮浪者は、頭をかいた。

アオコイ酋長とよばれている人は、にこにこしながらいった。

「学校にいかせてあげたいんですね。」

「ええ、まあ。実の娘を見ているような・・・・。」

「喜んでおひきうけしましょう。マノボ族ですか？お父さんが亡くなられたとか。病気ですか？」

「ちょっと、ここでは、言いにくいんだが・・・。」

上記の子たち以外にも多くの子たちが待っています。支援者の無い子の情報を知りたい方は、
サイト「ミンダナオ子ども図書館だより」http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanewsから、
「まだ支援者の無い子たちの紹介サイト」に。パスワードはmindanao。そこからメールで連絡もとれます。

ミンダナオ子ども図書館の子どもたち

「おーい、エープリルリン！」アオコイ酋長は、奥さんの名をよんだ。

しばらくすると、こがらなしっかりした感じの女の人が出てきて、酋長の横にたった。

「まあまあ、山菜売りの少女たちね。頭の荷物、重いでしょ。下ろしなさい。だいじょうぶ、ぜんぶ買ってあげるから。ここにはね子どもたちが、たくさんすんでいるのよ。だからおかずにちょうどいいわ。」

そういうと、奥さんのエープリルリンは、地面におかれたタライの前にしゃがむと、そばにいた子どもたちに、束になった山菜を手わたしていった。

「台所に、はこんでちょうだい。夕ごはんに、みんなでお料理してね。」

アオコイ酋長は、ズボンのポケットから財布をとりだすと、クリスティンにお金をわたしていった。

「これで足りるかい？」

「多いわ。」

「それなら、おこづかいとして、とっておきなさい。」

奥さんが、ギンギンたちにたずねた。

「あなたたち、どこにすんでいるの？」

「山の谷そこ。」

「自分たちの畑はあるの？」

「ない。」

「そうでしょうね。山で山菜をつんで、何とか生活しているんでしょ。学校にいきたくてここにきたの？」

ギンギンとクリスティンとジョイジョイは、大きく首をたてにふった。

ギンギンがいった。

「市場のそばでシンカマス（砂糖大根）を売っているお母さんにあったの。その人が、ミンダナオ子ども図書館に行ったらいいって。ここにこれば、学校に行けるって。自分の娘も、目の病気をなおしてもらったあと、学校にいかせてもらっている、って。」

ギンギンのそばに立っていた、髪の毛がふさふさした少女が、ビックリしていった。

「それ、わたしの母さんよ！」

ギンギンは、自分と同じ年頃の少女にちかよると、両手をにぎった。

「あなたがジサね！わたし、ギンギン。」

酋長の奥さんは、後ろにひかえているストリートチルドレンたちを見ていった。

「あなたたちも、学校に行きたくて来たの？」

男の子たちは、激しく首を横にふった。

アオコイ酋長は、そんな男の子のようすをみて、浮浪者といっしょに声をたてて笑った。

「まあ、学校だけがすべてではないし。本当は、この世のすべてが、学校なんだ。自分の村に伝わっているマノボ文化の伝統を、おじいちゃんやおばあちゃんから学ぶことだって、すばらしい学問なのさ。町に出て、お金をもうけるだけじゃなくてね。」

となりで、浮浪者が、しきりにうなづいている。

「だからね、ここでは、子どもたちを学校に行かせてあげるだけじゃなくって、子どもたちが、自分で伝統文化を学んで発表するんだ。他の宗教や種族の友だちたちの前でね。」浮浪者がいった。

「学校教育で出来ないことを、ミンダナオ子ども図書館で独自にやっているという、わけだよ。わたしは、そこが何よりも気に入っているんだ。」

まわりにいた子どもたちが、顔を輝かせて話しだした。

「年一回、ムスリムの日、マノボの日、クリスチャンの日っていう、文化祭があるんだよ。」

「そして、平和の祈りとシンポジウム。」

「楽しいよー。」

「踊りを踊ったり、結婚式のまねをしたり。」

つづく

郵便振替口座番号　００１００　０　１８０５７
加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日三食たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても病院に行けないとき・・・

ミンダナオ子ども図書館支援方法

１、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）
直接下記の振替口座にお願いします。寄付をくださった方には年五回、４、６、８、１０、１２月に季刊誌『ミンダナオの風』と、時に特別号で絵本やＤＶＤをお送りしています。
自由寄付は、一番根幹になる寄付です。年間１４０名を超える子どもたちの医療費、支援者がまだ見つかっていないにもかかわらず採用した、放っておけない子たちの学費（現在 190 名弱）、子どもたちの食費や生活費（ほぼ２５０名）。そして読み聞かせに行った場所で、絵本の無い子どもたちに無償で届ける絵本の制作などに使われます。
季刊誌を楽しみにしている方の場合、生活の厳しい場合でも、わずかな寄付でお送りします。
不要の方は、ご一報いただければ幸いです。

スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも親のない子、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準としています。その中の特に何らかの事情で現地に置いておけない子は、本人の希望と保護者の了解で本部に住み、生活を保障し、大学まで通えます。奨学生は現在６２０名。本部に住んでいる子は、ほぼ 100 名。

１，大学生スカラシップ・・年額７００００円　（月額５８３３円、下宿代を加算）
２，高校生スカラシップ支援の方へ・・年額６００００円（月額５０００円）
振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校スカラシップ」と書いて、振り込んでいただければ、年５回の季刊誌と特別号に同封して、本人からの手紙、６月に成績表、８月に写真、１２月に新年カードが届きます。新規奨学生の紹介は､随時プロフィールと写真をお届けします。文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。
３，里子支援（小学生）・・・年額４００００円（月額３３３３円）
振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、季刊誌と特別号に同封して、８月に写真、１２月に本人が描いた新年カードが届きます。
新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。訪問の際は自宅にご案内。
プレゼントも可能ですが、僻地のため、返事は半年ほど後になる可能性があります。

その他の支援

１、保育所・下宿小屋建設支援・・・４０万円（建設費と建設後の修理代）
振り込み用紙の通信欄に「保育所」と書いて振り込んでいただければ、年五回季刊誌と同時に毎年１０月には、現状を写した写真をお届け。開所式参加や訪問も可能。数年ごとに修復。
２，植林環境支援・・・６万円（ゴムの木６００本、１ヘクタール、現地作業代を加えました）
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。
３、古着支援等・・・ウエッブサイトの支援方法をご覧ください。

詳しくはウエッブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」
http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews

ゆうちょ振り込み口座　00100-0-18057：加入者名　『ミンダナオ子ども図書館』
（インターネットバンキングも可能です）■銀行名　ゆうちょ銀行　■金融機関コード　9900
■店番　019　■預金種目　当座　■店名　〇一九 店（ゼロイチキユウ店）　■口座番号　0018057

スカラシップ・里親に関する質問、現地訪問、季刊誌停止その他に関する問合せは、
メール mcl.v.staff@gmail.com（日本人現地スタッフ）
Fax 0743 74 6465（日本窓口、前田容子）
電話番号：080－4423－2998（日本および現地転送・松居友）メール：mcltomo@yahoo.co.jp
現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines